持論時論

医療現場の疲弊 深刻化

新型コロナ禍

医師、インフェクションコントロールドクター（ICD）
八巻　孝之
（56歳・仙台市宮城野区）

新型コロナウイルスの国内感染が確認されてから、1年があっという間に過ぎた。マスクの着用や3密回避など、これまでの非日常が日常となった。語弊はあるが、「ウィズコロナ」が常態化しつつある。一方で、医療現場の疲労は深刻になるばかりである。やっと始まったワクチンの接種が一筋の光明とはいえ、際限ない治療に伴う疲労に加え、収束の見通しが立たないいら立ちが極限に達しつつある。新型コロナは、医療従事者を精神的に追い詰め、医療現場全体を疲弊させている。

◇　◆　◇

現在、医療現場は新型コロナ感染者用の病床確保が求められている。感染拡大が収まらない中、病床確保は急務に違いない。これは通常の病床を新型コロナ対策へ振り分けることでしか対応できない。いわば、病棟機能の再編である。機能の再編で医療従事者の日常業務に変更が加えられ、慣れない業務へのシフト、環境の変化への対応などを強いられているのである。

医療現場が最も注意しているのは感染予防である。これは通常診療に当たる医療従事者を含めた共通認識だ。現場での感染は、院内のクラスター（感染者集団）につながる。次々と院内クラスターが発生すれば、医療が崩壊する。

同時に感染すれば、出勤停止となり周囲に迷惑を掛ける。このプレッシャーも大きい。家族を感染させてしまう不安もある。家族を危険から少しでも遠ざけるため、帰宅しない医療従事者もいる。

感染防止のため、社会全体が不要不急の外出、面会を避けることが求められている。直接、会わなくても情報通信技術を活用することで、人間関係は維持できるという指摘もある。

だが、タブレットやパソコン越しに会話をしても満足感には限界がある。帰省を控える、あるいは友人に会うことを自粛することで、孤独感やいらだちを感じる人は多いだろう。医療従事者も同じである。むしろ、周囲を気遣い、自ら距離を置こうとする例も少なくない。

治療に当たる医療従事者のメンタルヘルスに注目した中国の論文が5件ある。その一つによると、武漢では50・4％が抑うつ、44・6％が不安、34・0％が不眠を訴えたという。71・5％が治療現場を突然、思い出すというトラウマ（心的外傷）を抱えていることが分かった。この傾向は、看護師に強く現れていることも報告されている。

◇　◆　◇

コロナ禍での医療崩壊の危機は、感染拡大に医療機関が対応できず、感染者が十分な治療を受けられない側面から語られている場合が多い。だが、現実はそれだけではなく、医療従事者が大きなストレスを抱え、疲れ果てて、患者やスタッフへの気配りができなくなりつつある。

このままでは燃え尽きてしまうことが懸念される。この不安が現場にじわじわと広がっているのだ。医療現場がコロナ禍で内側から侵食されていると言ってもいい。